

未来を見つめるまなざし



今日は、地域の小学校の六年生が、年に一度集まって行われる陸上競技大会だ。いくつも行われる競技の中でも、一〇〇メートル走が一番盛り上がる競技である。

「おい、見てみるよ。」

となりにはいた陽太が指さす方に視線を向けると、続々と入場してくる選手たちの中に、ひと際目を引く、テレビで見る外国人アスリートのような姿の選手が目に入った。いかにも足が速そうだ。いつもは自信満々な陽太もめずらしく緊張しているようだ。

一〇〇メートル走競技も後半をむかえたころ、会場中の視線が一点に集まった。いよいよ、陽太とあの選手が一緒に走る最終組が、出走の準備に入ったのだ。

「ようい……。」

出発のピストルがひびくと、会場が一斉にわき上がった。六人の選手の実力は互角だ。一気にゴールまでかけぬけた。最終組を制したのは陽太だ。あの選手は三着でゴールした。力いっぱい走り切った選手たちに、拍手と

称賛しょうさんの声がおしみなく送られている。そんな声に交じって、

「一着は確実だと思ったのに、見た目から期待するほど速くなかったなあ。」
という声が聞こえてきた。少なからず、ぼくも同じことを考えていたからだろう。三着に入ったあの選
手のことを言っているのだと、すぐにピンときた。もちろん陽太を応援おうえんしていたのだが、心のどこかで
は、何かすごいものが見られるのではないかと期待していたのになんとなく裏切うらぎられた気分だ。

次の日の夜、夕飯を終えて家族でニュース番組を見ていると、アスリー
トたちの激闘げきとうの様子が映し出された。今まさに、平和とスポーツの祭典・
オリンピックが行われているのだ。表しよう台の上の選手は一段いちだんとかがや
いて見える。

「やっぱりかっこいいなあ。メダリストは。」

ぼくが思わずつぶやくと、新聞の夕刊を読んでいた父が思い出したように
顔を上げた。

「先週見た番組で、ある選手が何度も挫折させつを乗り越えてきた様子が紹介しょうかい
されていて、感動していたところだったんだよ。メダルにとどかなか
った選手たちにも、目には見えないそれぞれの道みちのりがあったんだろ
うなあ。すべての選手に金メダルをかけてあげたいよね。」

その後もテレビを見続けていたぼくだったが、しばらくすると、さっき
は何となく聞いていた父の言葉が気になりはじめ、昨日の陸上競技大会で





の出来事を思い出し出していた。三着の健闘けんとうにも期待外れとささやかれていた、あの選手のことだ。見た目を理由に「足が速いのがあたりまえ」そう言われているような彼が、今になって気の毒になってきた。

何よりもぼく自身が、彼の外見や三着の結果といった目に見えるものばかりにとらわれていたのではないか。ベッドに横になってからも、考えがぐるぐると頭の中をめぐり、その日はなかなかねつけなかった。

いつもの公園で、陽太と待ち合わせて遊んでいると、陽太が話し始めた。

「あの大会の後、一緒に走ったあの選手とばったり公園で会ってさ。迷ったんだけど、話しかけてみたんだ。そしたらいいやつでさ、意気投合しちゃったよ。けっこうしっかり考えててさ。大会に向けて走り方を研究したみたいだし、何に対しても一生懸命いっしょうけんめいなやつなんだよ。おれ、中学行ったらさ、あいつと一緒に陸上やりたいな。」

そう言う陽太の目に見えていたのは、きっと見た目だけじゃない、彼の本当の姿だったのだろう。そのまなざしは、未来を見つめているようだった。



テレビの中のオリンピックも最終盤さいしゅうばんをむかえている。そこには、自分の精一杯せいいっぱいをかけてぶつかり合った者同士の、清々しい笑顔がかがやいている。世界は広い。

「ぼくの目には見えていないことが、まだまだあるはずだ。」

そうつぶやきながら、ぼくは公園のジャングルジムの上から、白い雲のわいた夏の空を見上げていた。